

## 東北地方太平洋沖地震に伴う農作物被害の技術指導について(第3報)

### －水田における農業用水の不足や遅れへの対策－

平成23年3月25日

農林水産部担い手支援課

#### 復旧の見込みに応じた早期の対処が最も大切

- 1 希望的観測で待っているうちに、他品種や他の作目への転換に必要な「種苗、肥料、農薬」等の手配が間に合わなくなることもある。  
各地域の土地改良区等に用水の復旧見込みを確認することが対策の基礎である。
- 2 関係機関においては、情報の共有と連携の強化により、上記の各農業者の判断を支援することが大切である。

#### 1 水稲から他の作目に転換する場合の対処

- (1) 種苗、肥料、農薬等が確保できるものから作目を選択する。
- (2) 液状化現象や設備損壊等に伴う排水不良による地耐力の低下を見込んで、機械作業の可能性を検討する。
- (3) 用水の確保見込みに応じて、晩生の飼料用米の導入を検討する。
- (4) 大豆については、機械の確保や作業の委託を検討する。

#### 2 田植えが例年より遅くなる場合の対処

- (1) 5月中下旬移植の「コシヒカリ」については、次の事項に従う。

##### ア ほ場選択

5月中下旬移植の「コシヒカリ」栽培では、農業用水が5月上旬から9月上旬まで確保できる地区、ほ場を選定する(用水期間の延長可能性等について土地改良区に確認する)。

##### イ 育苗

- (ア) 稚苗移植の場合、田植え予定日の14～18日前には種する。
- (イ) 高温期の育苗なので、育苗ハウスの温度管理に注意する。

##### ウ 移植

- (ア) 疎植では減収しやすくなり、青未熟粒が多くなって玄米中粗たんぱく質含有率が高くなるので、「栽植密度は55株/坪以上」にする。

##### エ 本田作業

- (ア) 雑草がある程度発生した後に代かきで土中にすき込み、その後に除草剤を散布する。
- (イ) 生育期の気温が高いために慣行に比べて移植期から幼穂形成期の期間が短くなる。このため、全量一発肥料の使用は避ける。表1及び表2の施肥量を目安

にして基肥を施用し、葉色から穂肥の施用を判断する。砂土の場合は、基肥窒素量を下表の値より1kg程度上乗せする。

**表 1 4月下旬～5月上旬移植における施肥量の目安(壤土の湿田の場合)**

窒素		りん酸	加里	
基肥	穂肥	基肥	基肥	穂肥
3kg/10a	3kg/10a	8～11kg/10a	7kg/10a	3kg/10a

**表 2 5月中旬～5月下旬移植における施肥の目安(壤土の湿田の場合)**

窒素		りん酸	加里	
基肥	穂肥	基肥	基肥	穂肥
1.5kg/10a	3kg/10a	8～11kg/10a	7kg/10a	3kg/10a

(ウ) イネミズゾウムシやイネドロオイムシ等の初期害虫や斑点米カメムシ類の加害時期、及びいもち病の発生時期等がこれまでと異なると想定されるので、ほ場を十分に観察して適期防除を図る。

(エ) 幼穂形成期、出穂期及び成熟期がこれまでより遅くなるので、灌漑も例年より遅い時期まで必要になる。登熟期間中の灌漑水の不足は、減収、品質低下につながるので、「最低でも出穂後 25 日間の用水確保」を図る。

オ 参考

**表 3 生育ステージ(千葉市緑区の場合)**

移植期	幼穂形成期	出穂期	成熟期
4月下旬～5月上旬	7月1半旬	7月5半旬	9月1半旬
5月中旬	7月2半旬	7月6半旬	9月2半旬
5月下旬	7月3半旬	8月1半旬	9月3半旬

**表 4 収量と収量構成要素の目標値(4月下旬～5月上旬移植)**

目標収量 (kg/10a)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	一穂粒数 (粒)	m <sup>2</sup> 当たり粒数 (粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
600	400	85	34,000	85	21.0

**表 5 収量と収量構成要素の目標値(5月中旬～5月下旬移植)**

目標収量 (kg/10a)	穂数 (本/m <sup>2</sup> )	一穂粒数 (粒)	m <sup>2</sup> 当たり粒数 (粒)	登熟歩合 (%)	千粒重 (g)
510～540	280～320	90～100	28～30,000	85	21.5

(2) より遅い移植については、おって情報を提供する。